

【国際研究フォーラム】

植民地主義と口承文芸研究

石井 正己

一、広場としての口承文芸

国際化と情報化が急速に進む中で、口承文芸とその研究に関する議論が緊急を要することは、大方の認めるところにちがいない。柳田国男によって作られた術語である「口承文芸」が、ちょうど同じ時期に生まれた「国民俗学」の思想と密接に関わることは、もはや多弁を要しないだろう。そうした事実はずでに過去のものだという批判があるかもしれないが、今なおそうした呪縛から自由になつてはいないように感じられる。

口承文芸研究の始まりが民俗学にあるにしても、日本口承文芸学会の発足はそうした呪縛を解体することを目論んでいたのではなかったか。実際、民俗学だけでなく、文化人類学、国文学、国語学、歌謡史、芸能史、音楽学、児童文学などさまざまな研究者が寄り集まっている。それは学問の細分化というよりも、むしろ、専門化によって閉塞する学問をつなぐ、こう言っ

てよければ、「広場」であろうとしたのではないか。

この間の動向を振り返ってみても、口承文芸研究はアカデミズムに確固たる基盤を持たないぶんだけ、既成の学問に対する異議申し立てに自覚的だったのではないか。だが、一方で、専門とする研究分野が多彩であるだけに、開かれた議論ができなければ、かえって孤立感が深まるばかりで、内部分裂を引き起こしかねない脆弱ささえ持つているように感じられる。

思えば、近代社会は郵便・電話に始まり、近年ではファックス、携帯電話、パソコンといった機器が普及し、生活が大きく変容しつつある。そうした時代にあつて、口承文芸の役割は相対的に小さくなつてしまつたと言えるのかもしれない。だが、そうした状況にあるからこそ、口頭で伝えることの役割はますます大きくなつてきている。昔話にしても、早く記録しなければ消滅してしまうという危機感を煽つて調査が進められたが、近年、各地に語りの会が生まれ、未来に語り継いでゆこうという活動が始まつている。

研究者が自分の関心事にとらわれている間に、社会状況は目まぐるしく変化していて、人類の根源的な営みである口承文芸の意義が切実に問われる時代を迎えている。私たちは今、口承文芸という広場をできるだけ広く、そしてどこからも出入りができる場所に改革してゆく必要がある。そうした時代の雰囲気を読めないならば、「事業仕分け」の対象になつて、切り捨てられても仕方がない。

時代の雰囲気と言うことならば、あらゆる問題が一国では解決できない状況にあつて、国際的な学术交流は必須の課題になつてゐる。この学会では、平成一八年(二〇〇六)三月、当会長長でもあつた荻原眞子さんが「グローバルイズムのなかの口承文芸」をテーマに、第一回の国際研究フォーラムを開催している。この時は勤務校の千葉大学の研究助成を使って実施したもので、その記録が『口承文芸研究』第三〇号に残っている。私はシンポジウムの司会を務めたこともあつて、この「初めの一歩」をさらに二歩、三歩と進めなければ逆戻りしてしまうのではないかと感じていた。

二、植民地時代の口承文芸研究

これまでも述べてきたことだが、柳田国男の口承文芸研究は、昭和四年(一九二九)の『日本神話伝説集』、昭和五年(一九三〇)の『歌・俳句・諺』(折口信夫・高浜虚子共著)と『日本昔話集 上』から始まる。「伝説」「昔話」「諺」の概念は、アルスの発行した日本児童文庫の出版と密接に関わりながら立ち上がってきたのである。しかも、柳田自身が同時に『日本伝説集』『日本昔話集』『ことわざの話』という改装本を作つて、各地の研究者に配つてゐる。なかでも『日本伝説集』『日本昔話集』は、その後もなく『日本の伝説』『日本の昔話』と改題され、何度も出版されている。

実は、『日本昔話集 上』は「上」とあるとおり、『日本昔話集 下』もあつて、こちらは昭和四年に発行されていた。金田一京助の「アイヌ篇」、田中梅吉の「朝鮮篇」、伊波普猷の「琉球篇」、佐山融吉の「台湾篇」の四編が収録されている。アイヌは北海道、琉球は沖縄県だから今でもすんなり納得されるが、当時は朝鮮と台湾も「日本」だったのである。『日本昔話集 下』は植民地時代の雰囲気の色濃く帯びていたことがわかる。

柳田の『日本昔話集 上』は、北海道と沖縄県を除いただけで、そのまま現在の「日本」に包括されるので、改版された『日本の昔話』は戦後そのまま生きのびた。一方、『日本昔話集 下』は単著でなかったこともあつて、その後改版されることはなかった。そして、戦後はそんな「日本」があつた事実に触れること自体が避けられてきたのである。それを隠蔽と呼ぶべきか、忘却と言うべきか、にわかに判断することは難しいが、どちらにしても消すことのできない歴史であることは言うまでもない。

おそらく『日本昔話集 下』は氷山の一角にすぎない。植民地が台湾、樺太・北海道、朝鮮、南洋群島、満州へと拡大してゆく中で、多くの資料が刊行されている。そうしたことは同時代を生きた人々ならばよく認識していたはずであるが、研究者たちは一様に寡黙だった。戦後の研究は国際化をめざしながらも、植民地時代の資料や研究は、腫れものに触るかのようにしてきたと言つてもよいように思われる。

しかし、今、国際化の時代を迎え、新たな一歩を踏み出そうとするならば、どうしても植民地主義の問題と向き合わざるをえない。かつて植民地における口承文芸の調査は、多くの場合、民情の掌握という性格を持っていたので、資料的な価値はないとして切り捨てる立場があるかもしれない。だが、現在のような録音技術に拠る客観的な資料が作られるようになって、時代の呪縛から自由ではない。そうしたことを考えるならば、資料批判を行いつつ利用すべき貴重な遺産として、植民地時代の資料の多くが埋もれていると言っている。

実は、皮肉なことだが、それぞれ地域における口承文芸の調査と研究は、日本による植民地統治と密接に関わりながら始まっていることに注意しておかねばならない。もちろん、その後、地元の出身者による本格的な調査や研究が始まれば、それは萌芽期にすぎなかったと言うこともできよう。しかし、そのようにして調査と研究が始まった事実があるならば、それ自体を抱え込んだ視野を構築していかなければ、さらに不幸な歴史を重ねることになるのではない。

三、「台湾昔話の研究と継承」の成果

私自身はそうしたこともあって、歴史認識の中から国際化時代の口承文芸研究を考えたいと思ったので、平成二〇年（二〇〇八）一二月、勤務する東京学芸大学で、「植民地時代の

昔話／グローバル社会の昔話」をテーマに、第二回の国際研究フォーラムを開催した。これは、連合大学院を構成する広域科学教科教育学研究経費で採択されたプロジェクトによって実施した。年度末には、『台湾昔話の研究と継承——植民地時代からグローバル社会へ』という報告書を刊行している。そうしたこともあるので、講演や報告の詳細はそれに譲り、ここでは私見を交えつつ、その概要を紹介することにした。

まず台湾を選んだのは、北海道はともかく、日本が最初に植民地にした地域であることが大きい。それとともに、台湾に関しては植民地時代に関する研究が進んできていることを実感していた。企画を立案する際には、研究ばかりでなく、実践的な活動と結びつけること、口承文芸にとどまらず、児童文化や国語（日本語）教育に広げること、過去の認識だけでなく、そこから未来を考えてゆくこと、の三点を考えていた。

午後から始まったフォーラムは、まず会長の大島建彦さんが、「日本民俗学と台湾研究」と題して挨拶をしてくださった。短い時間の中で、日本民俗学の中で展開された台湾研究のポイントを押さえられた。最近の研究では、柳田国男や折口信夫が沖縄より前に台湾から大きな感化を受けたことが重視されつつある。台湾研究の歴史は、文化人類学の研究動向と合わせて再考すべき余地があるだろう。

続いて、私が「なぜ植民地時代を問うのか」と題して趣旨説明を行った。私的な関心も交えながら、『遠野物語』から『ア

イヌ神話集』へ」「忘れられた『日本昔話集 下』」「生蕃伝説集』から『日本昔話集 下』へ」「綴り方教育の中の民話と『七娘媽生』の四点を取り上げた。どの課題についても関心が先立つばかりで遅々とした状態なので、こうしたフォーラムの機会を使って新しい研究を進めたいと考えていた。

記念講演は、植民地の文学や教育の研究をリードしてきた川村湊さんをお願いした。口承文芸学会ということを意識してくださったのか、「文学における声と文字」と題して、アイヌの金田一京助、台湾の西川満、南洋群島の中島敦の三人を取り上げ、文字を持つ人間が無文字の社会と向き合う姿勢について触れられた。植民地の言語を日本語で記録すること自体が大きな問題になるが、国内でも、地方の言語を標準語（共通語）で記録するという点において、事の本質は変わらない性格を持っている。

後半のシンポジウムは、「台湾昔話の研究と継承」をテーマに四人の報告を得た。林佳慧さんは「台湾原住民の昔話と漢族の昔話」と題して、台湾における民族と昔話の二重構造を明らかにし、日本や中国への展望を示唆された。游珮芸さんは「台湾における口演童話活動の展開」と題して、巖谷小波や久留島武彦らの活動を明らかにし、「国語」教育との密接な関係に言及された。伊藤龍平さんは「台湾における国語／日本語教育と昔話」と題して、公学校用の国語教科書に採択された昔話を指摘し、ある公学校教師の昔話教育の実践を分析された。野村敬

子さんは「台湾から来た花嫁の語り」と題して、台湾から来た花嫁邱月秀さんの語りを取り上げつつ、彼女が置かれた環境について述べられた。

最後に、中村とも子さんが挨拶をしてくださったが、時間もわずかだったので、後に、「フォーラムの場で考えたこと」と題して総括してくださった。「今だからこそ」のフォーラムであったという現代性を評価してくださったが、「今回のシンポジウムで使用されたことばは日本語だけであった」という苦言は重い。今後はもっとダイナミックに開かれたフォーラムにしてゆくための企画力が必要になるだろう。

四、国際研究フォーラムの未来

改めて振り返ってみるならば、昭和五〇年代（一九七五～一九八四）は口承文芸の調査と出版がブームに乗って急速に進んだ時期と言っていいだろう。大型の録音機を持ち歩く調査から、カセット・テープによる軽量化が図られ、誰もが一台所有できるようになり、膨大な記録が残されるようになる。それまでの資料集はほとんどが自費出版で作るしかなかったが、時には出版社から刊行される場合も生まれている。

そうした動向と密接に関わりながら、大学や地域に研究会が生まれ、全国組織の学会も軌道に乗ってゆく。この学会も、昭和四九年（一九七四）にフィンランドで行われた第六回口承文

芸国際会議に端を発し、昭和五一年（一九七六）に韓国で開催された東北アジア民俗学シンポジウムを受けて、翌年に発足している（『口承文芸研究』第一号）。「趣意書」には、「わが国における口承文芸研究を促進する」こととともに、「世界における斯学の発展に、寄与する」ことが謳われていた。

しかしながら、学会運営の中で国際的な学术交流がどれほど実現したかと言えば、必ずしも目が行き届かなかったというのが実情ではなからうか。むしろ、当初の気運とは裏腹に、国際的な学术交流は急速に後退し、どんどん内向きになってしまったように感じられる。こうした事態になっているのは日本だけの問題ではなく、それぞれの国の政治や経済と不可分であることも否定できない。そうした要因はあるにしても、研究者の中に、仲間うちの業績作りに閉じるのではなく、まずもって国際的に開いてゆこうとする意識改革が必要だろう。

さらに言えば、こうした国際的な学术交流は、持続可能なものにしてゆかなければ、まったく意味がない。初めて実施してみても、今回程度の規模のフォーラムならば、研究助成を外部資金として導入すれば継続は可能だろう。もちろん学会で国際交流事業に申請して実現するのが理想だが、実績がなければ採択は難しい。むしろ、こうしたフォーラムを重ねることが、やがて外国人研究者の招聘等につながってゆくだろう。

私自身は、さらに樺太・北海道、朝鮮、南洋群島、満州に関する国際研究フォーラムを開催し、その報告書を発行したいと

いう希望を抱いている。もちろん、台湾に関する第二回を実施することもあり得るだろう。だが、それ以上に、学会と関係があってもなくても、こうした国際的な学术交流の企画・運営に名乗りを上げてくれる人が、国内はもとより、海外からも次々と現れてくることを望みたい。そうした交流が進めば、国際的な規模で未来志向の学問が構築されてゆくにちがいないからである。

なお、今回実施してみても、国際的な学术交流ばかりでなく、学際的な学术交流が必要であることを痛感した。口承文芸を自明のものとして特化するのではなく、相対的な位置を認識することがやはり大切である。こうして始まった国際研究フォーラムはまだ産声を上げたばかりだが、ささやかであっても持続的な歩みを重ねることなしには、今後の口承文芸とその研究はもはや成り立ちがたいように思われるが、いかがであろうか。

〔付記〕 国際研究フォーラムの報告書は二〇〇部印刷しましたが、すでに残部がありません。申しわけありませんが、図書館等でお読みください。

（いしい・まさみ／東京学芸大学）